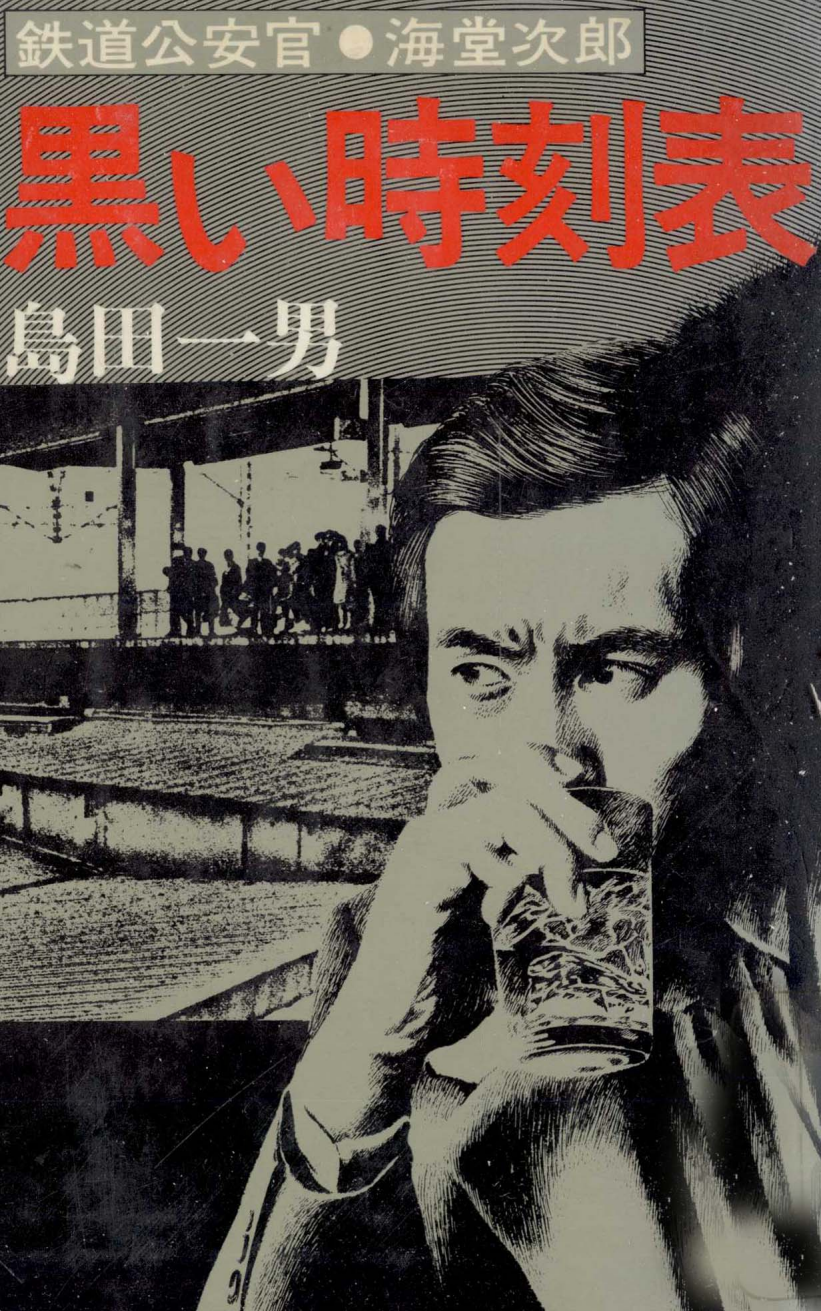
鉄道公安官●海堂次郎

黒い時刻表

島田一男



「茶の水」図書館蔵書

黒い時刻表　六三〇円
昭和五十二年三月十日発行

著作者　島田一男
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
本　社　東京都新宿区西大久保三―二六
出張所　東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六―二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

鉄道公安官●海堂次郎

黒い時刻表

島田一男

目次

湖西の女郎蜘蛛……5
蠢めく遺言……53
賽の河原の女……101
龍宮の姫食鮫……151
新婚特急の死神……199
牝豹の軌道……249

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

装幀　福田隆義

湖西の女郎蜘蛛

1

十八時発の広島行〝ひかり〟181列車を、東京公安室の捜査係海堂班長はジッといつまでも見送っていた。

「――頼むぜ。きょうはいい天気だ。広島まで八九五キロ、無事に走ってくれよ……」

いつものことだ。下り列車を見送る度に海堂は口の中で、こんなことを呟く。

上り列車を迎えるときは、――ご苦労さん。さぞ疲れたろうなァ……である。

海堂はゆっくり走りながら、さりげなく左右へ目を配った。ベージュのズボンに、ちょっとくたびれたサファリージャケット……。こんな姿の海堂を私服の公安官と思うものはないであろう。

公安官の捜査係が一番注意するのは移動性常習集団窃盗犯なのだ。

どういうものか日本のお役所用語には難しいものが多い。わいせつ物公然陳列は、もう一般語に近くなって来た。入国管理令在留資格違反とは……？　外国人女性の観光客が実は円稼ぎの金髪ストリッパーだったりすること。この法律にひっかかると国外追放である。

では、移動性常習集団窃盗犯とは？　つまり集団長箱師――列車専門の集団スリのことなのだ。

「――異常はねェようだなァ……」
退社ラッシュの北口通路でD型に腹の出た捜査係の加藤主任に声を掛けられた。
「主任さんは十二、三番線ですか？」
「ウン。〝出雲〟と〝あさかぜ1号〟を送って来たよ」
東海道新幹線開通以来、東京駅の列車状態はずい分変った。現在、名古屋以遠と東京を結ぶ列車は新幹線に集中。特急〝ひかり〟〝こだま〟を合せて上下とも九十八本ずつ、それに反して、東海道本線を走る長距離列車は上り下りとも僅か十一本ずつである。
特急〝出雲〟は山陰の浜田へ、〝あさかぜ1号〟は博多へ行く寝台特急である。
公安室は北口通路を出たすぐ近くにある。
「ふざけるなッ！　わかっているんだ」
捜査係の部屋へ入ったとたんに、派手な怒鳴り声が聞こえた。
若い公安官の小田が、机を叩いて喚めいている。その前で二十七、八の和服の女が、澄ました顔で煙草をふかしていた。
海堂には女の後姿を見ただけで見当がついた。ほっそりとした撫で肩、綺麗な襟足、すっきりと夏物を着こなした姿……。女スリのスイバレお駒だった。
「ようッ！　久し振りじゃないか？　いつ出て来たんだ？」
お駒は顔を上げると、海堂と加藤主任を見比べるようにしてニヤッと笑い、煙草を揉み消した。
「何ンだ、旦那達まだここにいたんですか？」
「他じゃ、使いものにならないのさ」
「やれやれ！　栃木の刑務所で一年半勤めている間に、お偉いさんになって、どこかへ転勤と思って

いたのに……。そうと知ったら東京駅に顔出しするんじゃなかった」
小田が海堂の顔を眺めた。
「班長さんは、この女を知っているんですか？」
「知っているよ。おへその穴までね」
小田の顔に驚ろきの色が走ると、加藤主任がクスッと笑った。
「おれだけじゃない。主任さんもご存知さ。彼女は移動性常習窃盗犯なんだ」
「女スリですか?!」
「それも一匹狼でね。大体、雨の日は乗降客がカバンやハンドバッグの他に傘を持っており、何ンとなくせわしげで、注意が散漫になっている。そこを狙って、スイッと器用に頂くものを頂く。だから綽名(あだな)がスイバレ。雨降りってことさ。本名松井駒子。あたし達の間ではスイバレのお駒で通っている」
お駒が大きく溜め息をついた。
「それが貧欠になって、秋晴れのいいお天気にお上りさんのポケットをはたいた。その手を班長さんにグイッと掴まれちゃった。あれ以来、長々とご無沙汰しましたねェ」
「そしてまたきょうのようなカンカン照りの日にやり損ったというわけか？」
「飛んでもない。あたしゃ何ンにもしないのに、この人が無理矢理ここへ引っ張って来たんですよ」
お駒から指をさされた若い小田が、また、まっ赤になって眉毛をつりあげた。
「この女、入場券を出して遠距離乗車券と取り替えたんですよ」
「取り替えた？」
加藤主任が話の中に入って来た。

「よく判らねェなァ。詳しく説明してくれ」
「いや、博多発の〝ひかり〟１１０で着いた乗客の一人に頼んで長距離の乗車券を受け取り、その代り入場券を渡したんです。乗客は入場券でも出られますからね」
「１１０は十七時三十二分着だな。ラッシュの最中じゃねェか」
「そうなんです。だから、殺到する乗降客を押し分け、掻き分け、やっとこの女を捕まえて、引っ張ってきたんですが――」
「冗談じゃないわよッ！」
お駒は帯の間から入場券を取り出して、ポンッとテーブルの上に置いた。
「あたしゃ、いっしょに刑務所を出た仲間を見送りに来たんだ。入場券しか持っていないよ。嘘だと思うなら調べてごらん？」
お駒はスックと立ち上ると、先ずハンドバッグの中味をテーブルの上にぶちまけ、それから、シュッシュッと粋な博多帯を解き始めた。
加藤主任と海堂班長はニヤニヤと笑いながら煙草を吸っていたが、小田は赤い顔が青くなり、口をへの字に結び鼻で息をして、肩を大きく上下させている。
「何さッ。変ンな顔で笑って……」
色っぽい長襦袢姿になったお駒が、海堂に向って噛みつくようにいった。
「もうちょいだ。伊達巻きを取り、長襦袢と肌襦袢を脱げば、久し振りにおっぱいとおヘソが拝めるな」
「その代り、この人のいう長距離の切符が出て来なかったらどうしてくれるのさ？」
「まァいいだろう。そこら辺でやめな……」

加藤主任がニヤニヤ笑いながらお駒へ、ハイライトの袋を差し出した。
「お前がここでストリップをするときにゃ、先ず証拠は出ねェ。あたし達はそれで幾度か苦い目に合わされていらァね。もう帰ってもいいぜ」
加藤主任の言葉に、お駒はチラッと小田の方を見て——フンッ……と鼻を鳴らすと、着物を着はじめた。
「今夜ヒマかい？」
そうたずねる海堂の顔を、お駒が怪訝そうに眺めた。
「ヒマだというほうがいいの？　忙がしいという方がいい？」
「ヒマなら、出所祝いに晩飯でもおごろうと思ってね」
「おやまァそれはそれは。ヒマでございます」
そういってからお駒が、大きな声で笑った。

2

若い公安捜査官小田の水死体が、近江の湖西線蓬莱駅に近い琵琶湖西岸の砂浜で発見されたとの知らせが、鉄道電話で公安室へ入ったのは、翌々日の昼前であった。
「なぜだッ？　なぜそんなとこで、死にやがったんだッ？」
加藤主任が、捜査係の部屋の中を、足音を響かせて歩きながら、海堂達へ吐き出すようにいった。
「彼は、昨日は公休でしたねェ。実は、今朝出勤しないので、体でも悪いのかと思っていたのですが……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

「おれもさ。気にはしていたんだ。あいつは深川の方のアパートに住んでいる。母ひとり子ひとりだ。病気ならお袋さんから電話があると思っていたが……」
「とにかく、アパートへ行って来ます」
海堂は深川の八幡宮に近い小田のアパートへ車を飛ばした。小田の母親はまだ何も知らなかった。
「倅に何かあったのでしょうか？」
オロオロとたずねる母親に、海堂は本当のことをいえなかった。
「いや。何分、京都の公安室からの連絡なので、はっきりしたことはわからないのですが、後で東京駅の公安室へ来て頂けませんか」
「一昨日の夜帰って来ると、――明日中には帰って来る……といって、ボストンバッグ一ツで出て行ったのですけど……」
「どこへ行くといっていました？」
「京都です」
「京都に知り合いがあるのですか？」
老母は不安気に首を横に振った。
「東京生れの東京育ちで、関西に知り合いがあるなどとは聞いたこともありません」
海堂は公安室へ引き返すと、デスクを狭んで加藤主任と顔をつき合せた。
「どう思います？」
「おれは、どうもお駒がからんでるような気がしてならねェ」
「しかし、お駒はあの晩、ずっとあたしといっしょだったのですが……」
加藤主任が海堂の顔を見詰めた。

「ずッととはどういう意味だ？」
「次ぎの日の昼まで。昨日はあたしも公休でしたからねェ」
「海堂班長、貴公、お駒と――」
「ちょっと待って下さい。それは、公的な質問ですか？　私的な話し合いですか？」
「どちらでも、お前さんのいいように解釈するんだな」
「公的なら、何も答えません。あたしのプライバシーですからねェ。しかし、仲間の世間話としてなら、お駒は素晴らしい体の持ち主だったと答えましょう」
　加藤主任が、猪のように太い息を鼻から吹き出した。
「お前さん、お駒を――」
「おッと、〝を〟じゃなくて〝が〟なんですよ。目が醒めると、あたしは素ッ裸のお駒に抱っこされて、ネンネしていたんです」
「責めやしねェよ。お前さん独身だからな」
「いいわけになるかも知れませんが、あたしとお駒は晩飯を食いに出かけた。一昨日の勤務は五時までしたからね。新宿へ行って、蟹を肴にビールを飲んだ。そのとき、お駒に一服盛られたらしいんですなァ。多分あたしが、トイレに立っている間に睡眠薬でもビールのコップへ入れられたんでしょう。お駒に抱えられるようにして蟹料理を出たのは覚えていますよ。それからがわからない。次の日の昼近く、お駒といっしょに出たのが、渋谷の連れ込みホテルなんです」
「お駒とはどこで別れた？」
「渋谷駅で。その時のお駒の言葉がちょいと引っかかるんです。――あたし、あなたを敵にしたくない。大した悪事をしてるわけじゃないのだから……」

「それでお駒は？」
「あたしだけを降ろして、そのまま車でどっかへ行っちゃいましたよ」
加藤主任が首を傾げた。
「大した悪事じゃない……といったんだな？」
「裏を返せば、ちっぽけな悪事はしている、ということになりそうですなァ。そのお駒と捜査班長は一晩寝た。こいつは謹慎物でしょうか？」
「ウム、謹慎して貰おう」
加藤主任は立ち上ると——
「ここの定員は何人だ？」
「百八十八人です。だが、いま六人欠員です。いや、小田を入れると七人ですなァ」
「人手がねェなァ。謹慎中ヒマだろう。湖西線へ行って、小田の遺体の始末をして来ちゃどうだ？」
海堂は立ち上ると、丁寧に頭を下げた。
「わかりました。なぜ小田が琵琶湖で水死したかどうか、突き止めて来ます」
「頼む。妹さんへはおれが連絡をしておく」
海堂は、妹と二人暮らしなのだ。
「ついでに、もうすぐ小田のお袋さんが来ますから、彼が死んだことを話して下さい」
加藤主任が呆れた顔をした。
「お前さん、それをまだいっていねェのか？」
海堂はその言葉を聞き流して、公安室を出ると、十五番線へ向った。急げば十三時かっきりの博多行〝ひかり〟11に乗れる。

「あー、班長さん」
〝ひかり〟11のカレチが海堂を見て近づいて来た。—カレチとは鉄道の専門用語で専務車掌のことである。
「京都まで行きたいんだが?」
「どうぞ……」
海堂はカレチからグリーンの車掌持ち座席番号を教えられて、十一号車に乗り込んだが列車は一分後に発車した。
海堂はジッと目をつぶり考え続けた。——確かに、小田の死にはお駒がからんでいそうだ。あの日は小田も五時までの勤務だったが、その勤務中に格別の出来事は一つも報告されていない。小田にとって、ただ一ツの事件は、入場券を遠距離乗車券と交換したといって、お駒を公安室へ引っ張ったことだけである。そのお駒を加藤主任が帰した。ところが小田はすぐ深川へ帰り京都へ行くといってアパートを飛び出している。一体小田は何を考えたのだろう……?
——仮りに小田のいう通り、お駒が入場券と遠距離乗車券を取り替えたとして、お駒に何ンの利益があるのだろう……?
——新幹線の乗車券は、コンピューターで特急券、指定席券、乗車券が一枚で出てくるものもあり、乗車券だけは別に買う場合もある。新幹線停車駅以外で新幹線の乗車券を買えば、特急券と乗車券が別のことが多い。小田がいった長距離乗車券とは、特急券や指定席を含まぬ乗車券のことであろう……。
——その乗車券をお駒が手に入れたって、所詮は使用済みの切符ではないか……。
だが、海堂はハッと顔をあげた。

——お駒が同じ手口で何枚かの長距離乗車券を手に入れる。これを京都まで持って行き、途中下車で払い戻しを受けるとする。未乗車区間が五一キロ以上の場合は、乗車区間の運賃を差引き、手数料百円で払い戻す……。

——京都、東京間は三千九百円の払い戻しだ。もし十枚持っていれば、お駒の乗車賃を差引いても三万円、往復共この手を使えば五万から六万の日当になる……。

「——ふン。大した悪じゃない……か」

そう考えた海堂の肩が、ポンと叩かれた。ハッと振り返った目の前に、相変らず和服姿のお駒が、ニッコリ笑っていた。

「きょうは警乗勤務？　縁があるわねェ……」

3

海堂はお駒を食堂車へ連れて行った。——ビュッフェはかなり混んでいたが、食堂車の方は空いていた。

「いいの？　勤務中にお酒なんか飲んで……」

海堂がビールを注文すると、お駒の方が心配そうにたずねた。

「警乗してるんじゃないよ」

「あら、骨休め休暇旅行？」

「いや、ちょいと不幸があってね……。きみはどこまで？」

「フフフ……、京都よ」

お駒が、意味ありげな含み笑いといっしょに答えた。――海堂とお駒は一昨夜から昨日の朝まで同じベッドで寝ていたのだが、そのことについてはひと言も触れようとしない。これが大人の情事というものであろうか……。

「いま、幾枚持ってるんだ？」

「何を？」

「白らっぱくれるなよ。長距離乗車券さ」

「何もかもお見通しッて言い方ねェ」

「乗車券の有効日数は四〇〇キロまでは三日だが、六〇〇キロまで四日、八〇〇キロまで五日、一〇〇〇キロになると六日もある。取っ替えた長距離乗車券はこの期間中なら払い戻しが出来るッてわけだ。東京、新大阪間は五五三キロ、岡山になると七三三キロ、広島が八九五キロで、博多からなら一一七六キロさ」

「お生憎さま」

お駒がスッーとテーブルの上のハンドバッグを海堂の方へ押し出した。だが、海堂はそれを押し戻した。

「これには入っていないようだなァ」

「じゃ、帯を解きましょうか？」

「ここは公安室じゃないぜ」

「平気よ、あたしは……」

お駒は立ち上ると帯止めに手をかけた。

「大した勇気だなァ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb